

2月14日 怪物体内



「んっ……うっ……」

「目覚ナイカ…少シダメーシラ与エスキタカ…。
ウマイ…コノ手…素晴ラシイ…チヨコノ味ダ…。
全身カラ漂ウ甘い香り…。
エキステイア…コレハ期待以上ダ。
我ラノ同族トナル資格ガアル…。」

「シカシ…随分ト疲労シテルヨウダナ。
マア我ノ同胞トナルノダ…今ハ休マセテヤル。
ダカ種植エハ今ノ内ニ済マセテオコウ…」



「んっ…あ…♡」

「綺麗ナ臍ダ…。安心シロ…傷ハ残サナイ。
今カラ植エルカカオ種子ハ肉体ト同化シ育ツ…。
エクスティア…我が同胞へ生マレ変ワレ。」





うんうん

うんうん

うんうん

「うんうんうんうん」



「あう♡んんっ……
すっ……すっ……」

「イスレオ前ト共ニ成長シ時期ニ芽吹クダロウ。
ソレマデハ揺リ籠ヲ堪能スルトイイ。
世話モ全デシテクレル。何モ心配ハイラナイ。
エクスティア…同胞トナルソノ時ヲ楽シミニシテイヨウ。」







「んん…

…んんんんんん」

「何…生臭い…やう…」

これ…チヨコレート…いやカカオの香り…？」

「なう……？これは……？」
（呑み込まれたままだとすると……ここ……怪物のお腹の中……？
触手に拘束されて……腕が呑まれてる……ネットネットして気持ち悪いわ……
とにかく抜け出さないと……）





ガッガッ

ズッ

「はあああ……っーっーぐううううー」
（完全に吸い付かれてる……抜けない……っ……）

「…え…？何かいつもと違う…力が上手く入らない…？」
 (スーツは破損してるけど…エクスティアの変身は解けてない…。
 エクスティアは問題ないはずなのに…。
 PPも…何か変…。おかしいわ…。
 身体に力は感じるのに…上手く扱えない。)

「あぐっ!? うううっ…」
「何!? 力が抜け…っ…? んうううう!」

「んあっ……はあ……はあ……」

（収まった……何だったの……？）

触手のせい……？違う……身体のPPは抜けてない……

でも力を込めるとPPが抜けていく様な……漏れ出るみたいに……

こんな感覚……感じたことない……

やっぱり怪物にやられた時にエクステバイスが故障して……？

それとも怪物に何かされ……ううん……身体は何ともない……

スーツの破損以外は特に何も異常もないはず……）



「二晩寝テヨウヤク目覚メタカ。
種ヲ植エツツ感覚モ麻痺サセテオイタ。
体内ノ種ニモキツカナイタロウ。
エクスティア…オ前カカラ使用程体内ノ種ハソレヲ
吸イ肉体ニヨリ馴染ンデイク。
ドレ…少し弄ンデヤロウ。」



「貴方の目的は何なのっ！
早く私をここから出してっ！」

（私を拘束してるだけで何もしてこない…？
拘束を解こうと抵抗して…こんなに叫んでも反応が無い。
この怪物は何を考えているの…？）

原因はわからないけど私の方も万全じゃない。
普段ならPPを全開放すれば拘束は解けるかもしれないけど…。
いや…今の状態じゃ成功するかわからないわ。
不用意にPPを使うべきじゃない。

…やっぱり大人しく救助を待つしかない。」



「うーん」
(熱い……頭は何が……)



「あうっ！？熱いっ！…んぶっ！？げほっ！げほっ！」
（これ…怪物の体液…？汚いっ…！
嫌っ…口に入って…凄く苦いっ…！
えっ…でもこれ…チヨコレートの味…？）



「うーっんううううっ……」

（怪物の体液……止まらない……ゆっくりと浴びせられて……。
肌に纏わりついて……身体が熱い……焼けそう……っ……。
やっぱり無理をしても拘束を解いて……っ。

……いや……駄目だわ。

今は耐えるの……大事なPPをこんなことで使うわけには……。）



「んっ……あぐっ……」
（やっ……いっ……まで浴びせられるの……
汚いっ……もう全身を汚されたっ……
もう嫌っ……早く終わっ……）」



「んあああ♡ひやう…んううう…」

（へ…なんで…？私感じて…？）

どうしてこんなことで気持ちよく…？

まさかこの体液のせい…？これ以上浴びせられたら…。

…仕方ないわ。

迷ってる場合じゃない…今はとにかくこの状況を変えないと…っ！



「んぐっ…はあああ…」
（やっぱり…力が抜けて…っ…!!
でも一氣に使えば何とか…っ…）



「あぐっ！んうううっ……♡」
（身体が疼いて……上手く制御できない……っ！？
駄目……もう力が抜けっ……）

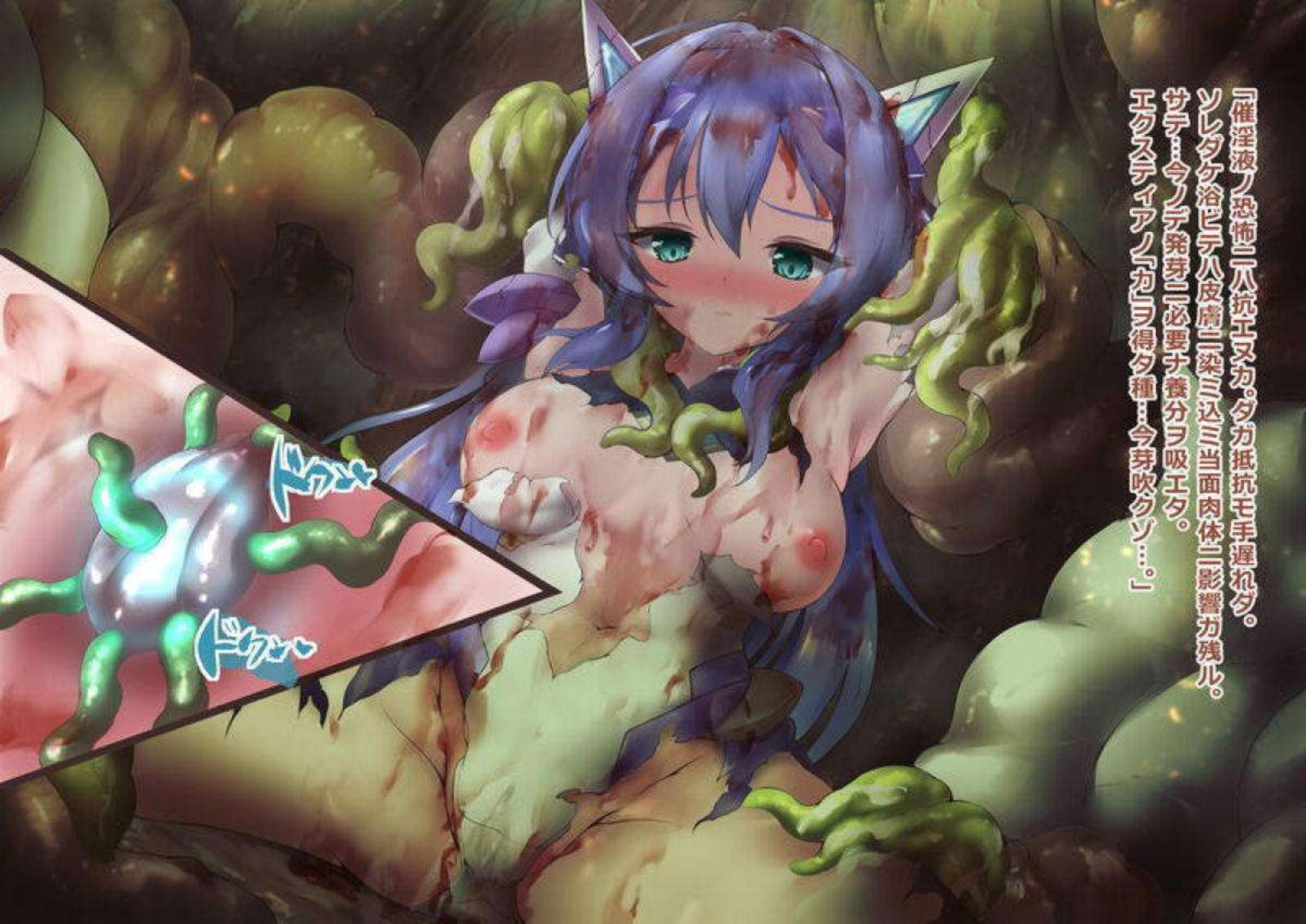
セツ

たろ

「はーっ…はーっ…。
何とか…なった…の…?」
（やっぱり変…。力抜けて…。
こんな状態じゃ拘束を解かれてもまともに戦えない…。
けど…纏わりついた体液は飛ばせたわ…。
身体の疼き…完全には消えてない…けど…少しは楽になった…。
体液も止まった…これで少しは時間稼ぎに…。）



「催淫液ノ恐怖ニハ抗エヌカ。ダカ抵抗モ手遅れダ。
ソレタケ浴ビテハ皮膚ニ染ミ込ミ当面肉体ニ影響力残ル。
サテ…今ノデ発芽ニ必要ナ養分ヲ吸エタ。
エクスティアノ「カ」ヲ得タ種…今芽吹クゾ…」



「あぐっ！…んんううう！？」
「お腹が熱いつ…！…？違っ…これ…お臍っ！？」
私のお臍…んぐっ！…凄くムズムズするっ！？
これ…何が起きてるの…っ！？」



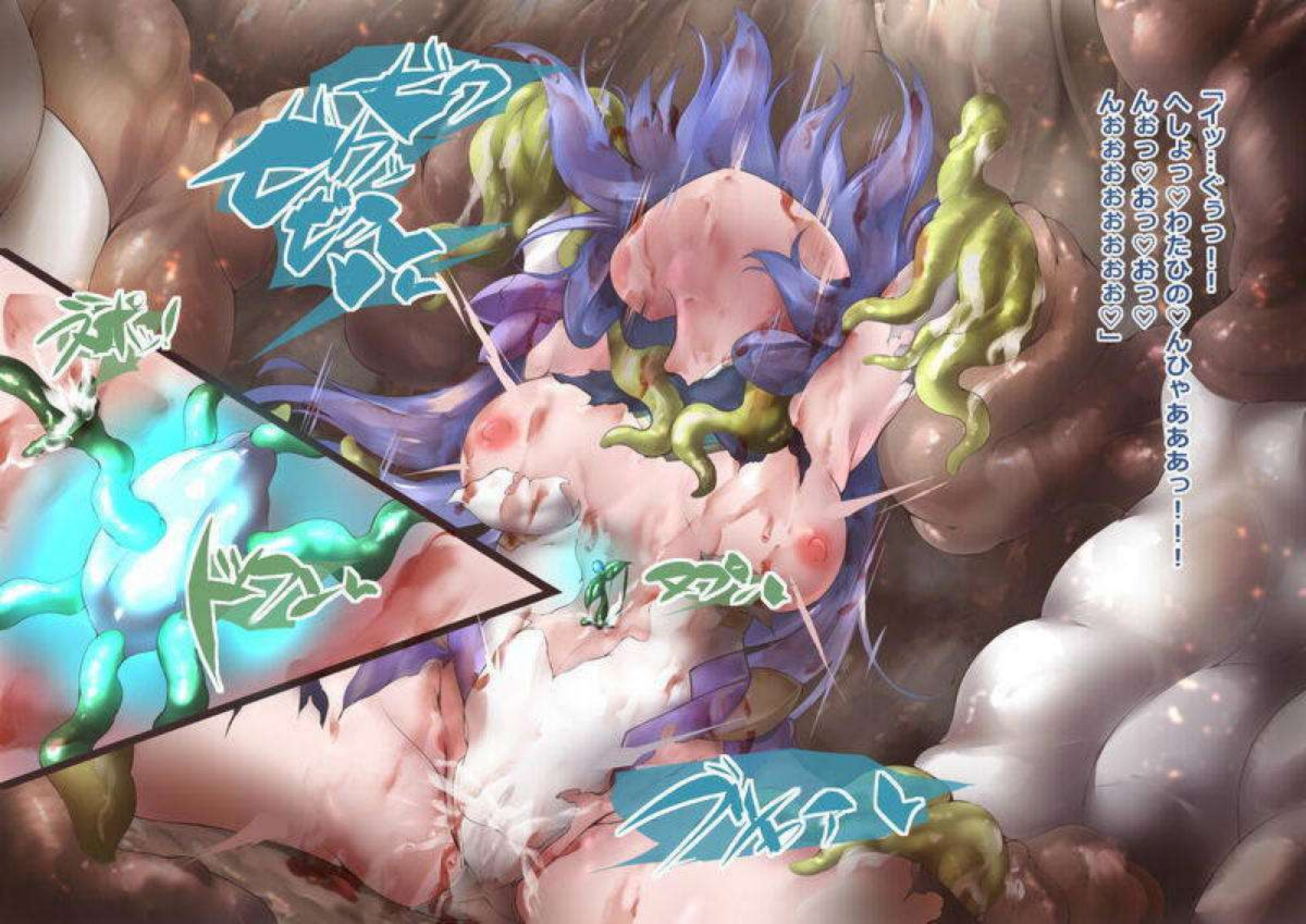
Salmon

お臍

「あがつ…♡お臍っ♡おかしっ…♡
嘘でしょ…私の中で何か蠢いて…んああ♡
ああおおおっ♡…嫌嫌っ！嫌ああ！
何されたのっ！…こんなの知らないっ！怖いっ！
でも何でっ！…これっ…んああ♡感じちゃうっ！
んおお♡お臍の内側ツンツンされてるっ！ありえないのにつ♡
やっ…いくっ♡…お願い止まってえっ！」



「アッ……アッ……
へしよっ♡わたひの♡んひゃすすすっ……
んおっ♡おっ♡おっ♡
んおおおおおおお」



「はっへっ♡…んんああ…!!
おへしよっ♡からっ…生えて…るっ♡
わたひのおへしよから何が生えてきてるううううっ♡
はへっ♡っく♡おへしよで動いてりゅうううう…また…イっくっ♡
ああお♡気持ちよしゆぎるっ♡…あっ♡ああああ♡
力抜けへえ…やっ♡漏れっ♡…んんああっ♡」

セー

お

うっ

「んあ……おお♡は——♡は——♡は——♡……
収まつ……た……？」
「……植……物……お臍から芽が出て……♡……？」
嘘でしょ……これが私のPPを吸って……お臍の中で成長してたの？
何なの？……怪物は私に何をしたの……？」



「あうっ♡……これっ……私のお臍に根を張って……っ……！
身体のPPがっ……んああ♡
うぐっ……さっきまでと違う……。
少しずっ……でも気付くくらいには吸われてるっ！？
芽生えて成長したせい……力も使ってないのに……っんああ♡」



「でも…原因さえわかればっ！

お臍のPPの流れを止めて…っく！

…これ以上はさせないわっ！

…あぐう♡大人しくして…っ♡んはあ…っへっっっ♡」

（この植物…抵抗してる…っ…お臍で暴れてっ…気持ちよへっっへっ♡

お臍…この植物にもう作り変えられちゃってるっ！

でも芽生えた時に比べれば…このくらいっ！

早くこの怪物から逃れて百合先生に何とかしてもらわないと…。

嫌な予感がする…これ以上成長させるわけにはっ…！）

グワッ

たっ

「よし…PPは吸われてない…これで時間を稼いで…
へ…何でっ…!?」
（嘘っ…スーツが…!?手足の部分だけで済んだけど…。
破損が大きいせい…?）」



「はぁ…はぁ…」

（まだ大丈夫だけど…このままじゃ…

いずれ変身が解ける…そうしたら…もう…

…この快感を生身で味わわないといけなの…？

お臍だけでもイカされたのに…絶対耐えきれない…壊される…。

この植物も成長したら何が起こるかわからない…。

そんなのやだっ…嫌だよお…！

早く来て…助けて…創ちゃん…。)



「まだ拒ムカガ残ッテイルカ。
デハソノカ：残サス種ニ捧ゲテモラオウ。
ソウスレバヨリ肉体ニ馴染ミ完全ニ同化スル。」

カチン



「うぐー？また体液っ…あうっうっ♡」
（私に抵抗させて更にPPを吸い上げる気…？
っ♡…あう…身体が熱いっ♡せっかく散らしたのにもう…。
さっきから私に合わせて反応を変えて…弄ばれてる…。
やっぱりこの怪物も私を見てるんだ…。
怪物の玩具にされて…こんなこと…っ…。）

おま

「うっ♡んああ♡お臍またっ！駄目よっ！」
（体液のせいでまた疼きが強くっ…ひゃううう♡
お臍からPP吸われ始めた…
止めたくても意識を集中できない…っ…！
やっ♡んああ♡駄目えっ♡
こんな状態でまたお臍で暴れられたらっ…！？）



「あーっーっ」

お勝やめっーんおおおお♡

激しっーっ！もう許ひてっー！止まっへえ！

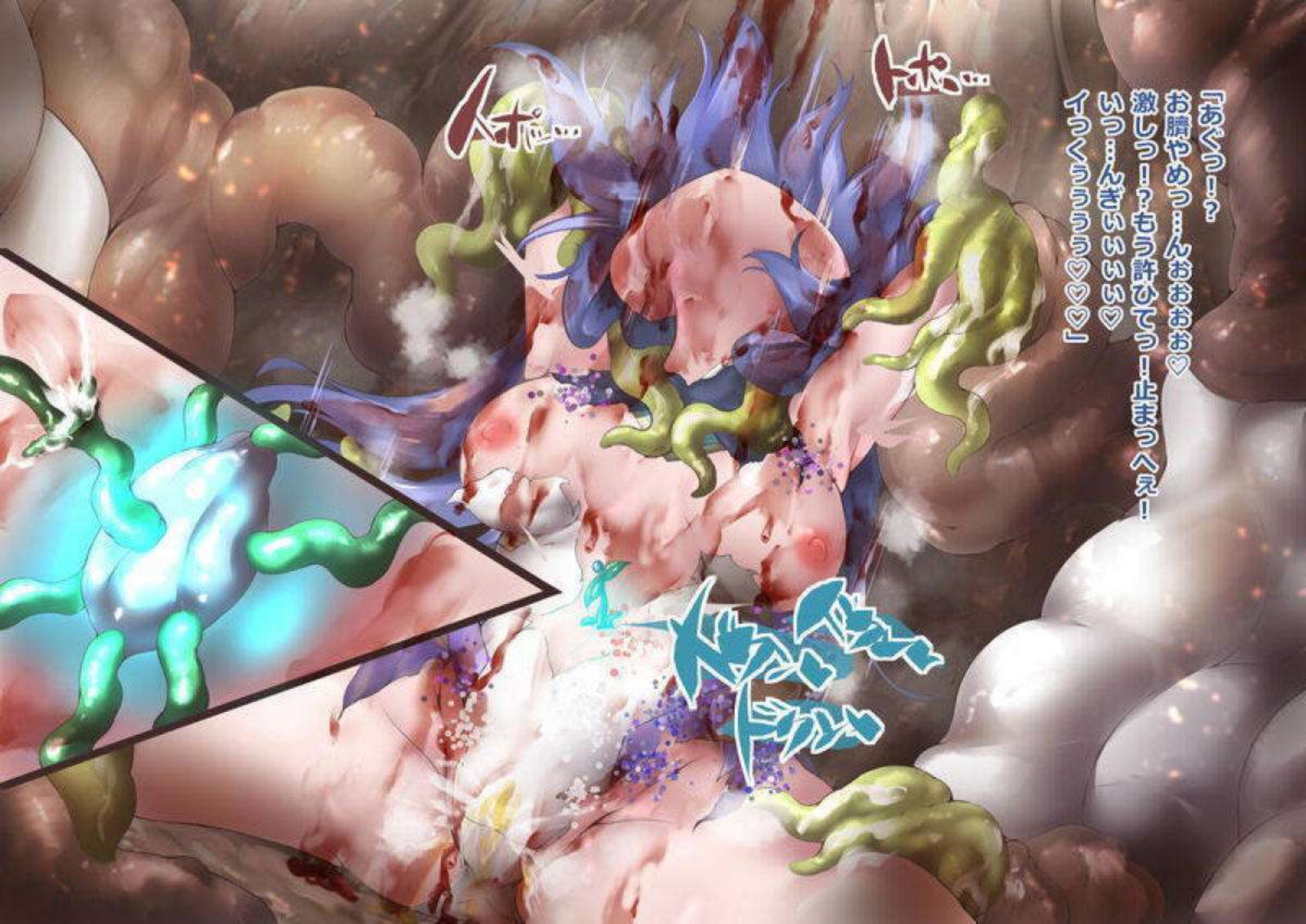
いっーんぎいらいら♡

イっくうううう♡♡♡♡♡

ハッ...

ハッ...

絶対
ドカン



「サア：エクスティア！。
時間ナライクラデモアル。
ユツクリト同胞ニ染メ上ゲテヤロウ。
イツマデ耐エラレルカサ？」



。1時間後。。

「う……ああ♡……やめああ♡
ん……おお♡♡」





「…催淫液ト臍ノ快感ダケテ壊レタカ。
ダガ安心シロ…種ガ馴染メバソノ快感ニモ慣レル。
同胞ニ近ツク程ナ…時期ニ正氣ニ戻ルダロウ。
エクスティアトシテノカモ種ガ全テ取り込シダ。
生キテイル限り変身ガ解ケルコトハナイ。

オ前ヲ支配シナイ…普通ノ苗床ニモシナイ…。
同胞化を終エレバオ前ハコノ星デ自由ニ生カス…。
クク…ククク…ツ！」

。2月22日

1週間経過：怪物体内。

「カラ絞リ尽タシタ：計画ハ順調ダ。
エクスティア：既ニ人ノ姿ヲシタ怪人ダ。
才前ノ力を凝縮シ生成シタギルツシードヲ臍ニ埋メ
込ンデアル。
身体ニ馴染ミ、命アル限リツノ姿ヲ保ツダロウ。
同胞ニナル者ガ壊ワレテイデモ困ルカラナ：。」



「はーっ…はーっ…んっ…ふううう…!」
（あれからどのくらい経ったの…?）
わからない…。体液を浴びせられて…それから…
とてつもない快感に飲まれてっ…
あの子の記憶が無い…。多分また気を失ってたんだけわ…。
目覚めた時にはスーッもこんな状態に…。
もう駄目かと思うたけど…まだ大丈夫。
それにしてもこれ…お臍の植物が成長したの…?）



「んあ♡…ううっ♡」
（スーツが私を締め付けて…っ…。
こんなことで感じちゃうっ…でも…耐えられる。何で…？
植物が成長して、これだけこの体液を浴びてるわ。
状況は悪化してるはずなのに…っ…っ…っ…
耐性が付いた？…流石にそんなことは…。）



「収まった…。はあ…はあ…」
（この怪物…体液も浴びせてこなくなった…。
もう充分ってこと…？）
スーッと締め付けては来るけど…お臍の植物も大人しい。
芽が生えた頃はもっと激しかったのに…」



「あぐっ…♡また吸って…もう出ないからっ!」
（もうPP…残ってないのに…っ。
完全にこの植物にエクステディアの力を奪われてる…。
…でもおかげでこれ以上は成長出来ないみたいね。
今の内に植物からエクステバイスとPPを取り返さないと…!）」



「成長ガ止マツタカ!。
同胞ニ近ツキ同胞ノ快感耐性モ得テイル。
最初ノ異常ナ快感ニ比ベレバ今ハ物足りナイ自慰行為ト変ワラナイ程ダロウ。
加エテ人格ヤ生命ニ支障ナイ状態ヲ維持シテイル。
コレ以上ハ栄養不足カ。
デハ少シ成長ヲ補助シテヤロウ。」



「触手……っへっそこはやめっ……っ」
（嘘でしょ……挿入る気なの……）
やっ……っち来ないでっ……！



「あぐっ♡んっ♡んっ♡」
（私のお○んこに…挿入ってきてるっ……）



さくら

さくら

「んううう♡挿入ってきたあ…♡
一気に奥までっ…♡」
（…拡げられてるっ…膣内…それに一番奥…っ…。
私の大事な所を…っ…
ああ♡…ここにも体液が染み込んで…感じちゃう…っ…!）

ズン♡
グン♡

「あがつー！...ひゃうううう♡んおっおおおっ♡」
「熱いっ！何か注がれてる...っ！」
「番奥っ！沢山っ！...♡」



「やっ…イぐっ♡おっ♡んおおおおおお♡」
（怪物の体液初めて浴びた時と同じ…。
凄く熱い…気持ちよくなってる…。
私の膣内…子宮…染み込んでっ…染められてるっ♡）



「んあ♡は——っ♡は——っ♡…」
（お腹…子宮が変…一体何されたの…？
それに何で…？…PPが回復して…！？
創ちゃんじゃないのに…っ…？
怪物の触手なんかでどうしてっ…嘘っ…嫌ああ！）



「んっっっ♡お臍またっ…吸い取ってくるっ♡
…えっ触手が…私の臍内につ…
やだっ…んああ♡」



「んううう♡はーっ♡はーっ♡…
触手挿入ったままなのにお○んこ覆われてっ…。
お臍の植物が成長した…んああ♡
嘘！……これっ…まさかスーツっもりなの…？」
（私のPPが増えたせいで成長しちゃってる…。
このままじゃこの植物のスーツに包まれて…っ！？）



「う……何う……この声？」
（まさかこの怪物の声……わからないけど……聞こえるわ……
でも急にどうしてなの……今まで全く聞こえなかったのに……）

「シ…？」

ホウ…コチヲノ思念ガ伝ワリ始メタカ。

肉体ガ染マリツツアルヨウタナ。

カモ注イタ…コレデ成長ガ進ム。

モハヤカヲ得テモ種ニ掌握サレ抵抗モ出来マイ。

ツイデニ瞳モ作り変エタ。

根ガ地面カラ吸収スルヨウニ子宮デ栄養ヲ吸収シカヲ得ル。

挿入シタ触手モ新タナ瞳ヲ形成シオ前ノ一部トナル。」

「次ハ胸ダ。オ前ニ相応シイ形デ実ラセテヤロウ。」



「また触手っ！……今度はおっぱい…私の乳首にっ……っ？
んっっっっ♡」

（何をする気なのかわからない…でも…どうなるかはわかる。
身体おかしくされる…お臍の植物が育っちゃっ…っ！）

ゴッ



「駄目っ！はうっ♡んううう♡」
（乳首にあの体液塗り込まれて…っ…！？）
触手が中でおっぱい入り込んでる…っ…！？）



「んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」
(熱いっ!? まだっ♡これ…子宮の時と同じ…。
何が注がれて…っ♡……)



「あきつーっおっはいの奥…何か押し込まれてっ…！？」
はひやああっ♡」



「んああ…♡は…♡は…♡は…♡は…♡は…
（触手が離れて…でも何か…
私のおっぱいはいに埋め込んで…っ…。
これ…お臍みたいな感覚…？
まさか…！？
駄目っ！成長しないでえー）」



「んぎい！...始まつ...たあああつ♡」

（やっぱりこれ...お臍と同じ...！）

私のおっぱいの中で大きくなってるっ！）



「おっぱい大きくなつてっ…破裂しそうっ！
んっうっうっ♡
んああ♡…はっ♡…はっ♡…」
（止まった…でも…私のおっぱいの中で蠢いてる…
…ムズムズするっ…!?）
まさか…まさかああ…っ!?」



「ほひっ！ーんいいい♡」
（おっぱい…出てるっ！ーミルク出ちゃってるっ！ー
それに私の乳首からも植物生えてきてっ！ー）



「はへっ!?!?…あう♡んうううう♡」
（やっ…お臍の時より成長が早い…早すぎるっ…!?!?
私のPPだけじゃなく…おっぱい…、ミルクまで吸って…っ…!?!?
おっぱいの植物…お臍の植物のスイーツに融合してるうう!）



「んあ♡…はひやああ♡」

（お臍の方の植物スーツと繋がって…

PPだけじゃなくおっぱいも吸われてる…っ…。

スーツだけじゃない…身体も植物に侵食されて…。

このスーツ…着てるだけで気持ちいい…っ…。

お臍もおんこも乳首も植物に支配されてる…。

もうどうにもできないの…？

私…怪物のエクステリアになっちゃうの…？）



「マモナク最高ノ同胞の完成ダ!。……素晴らしい。
エキスに母乳が加われれば、極上のミルクチョコレートとなるう。
もうすぐ全ての処置が終わる…」

「誰…また声が…? 処置が終わる…って?」
「この声…さっきの…?」
「どうして聞こえるようになったの…?」
「何を言ってるのかもわかるわ…」



「ほう…こちらの思考が完全に伝わるようになったか。
それだけお前の身体がこちら側に進んだという事だ。
エクステリア…いや我が新たな同胞よ。」

「わあ…！」

「ふ…ふざけないでっ！」

…私は貴方の同胞になん…ぐっ…？

嘘…っ！？身体が…染められてっ…？」「

「はぁ…はぁ…」

私にこんな植え付けて…同胞なんかにして何が目的なのっ…!?
こんなことで負けたりなんか…っ!」

「どちらが手助けしていなければ既に折れているのにか?
そんなお前に何が出来る?」

「え…?何を言つて…?私は折れてなんか…っ!」

「未来の同胞に壊れてしまつてはこちらに都合が悪いからな。

今のお前は自我を保たせる為、全てエクステディアとしての肉体に馴染ませ
たのだ。

その証拠に例えば変身を解くと…。」



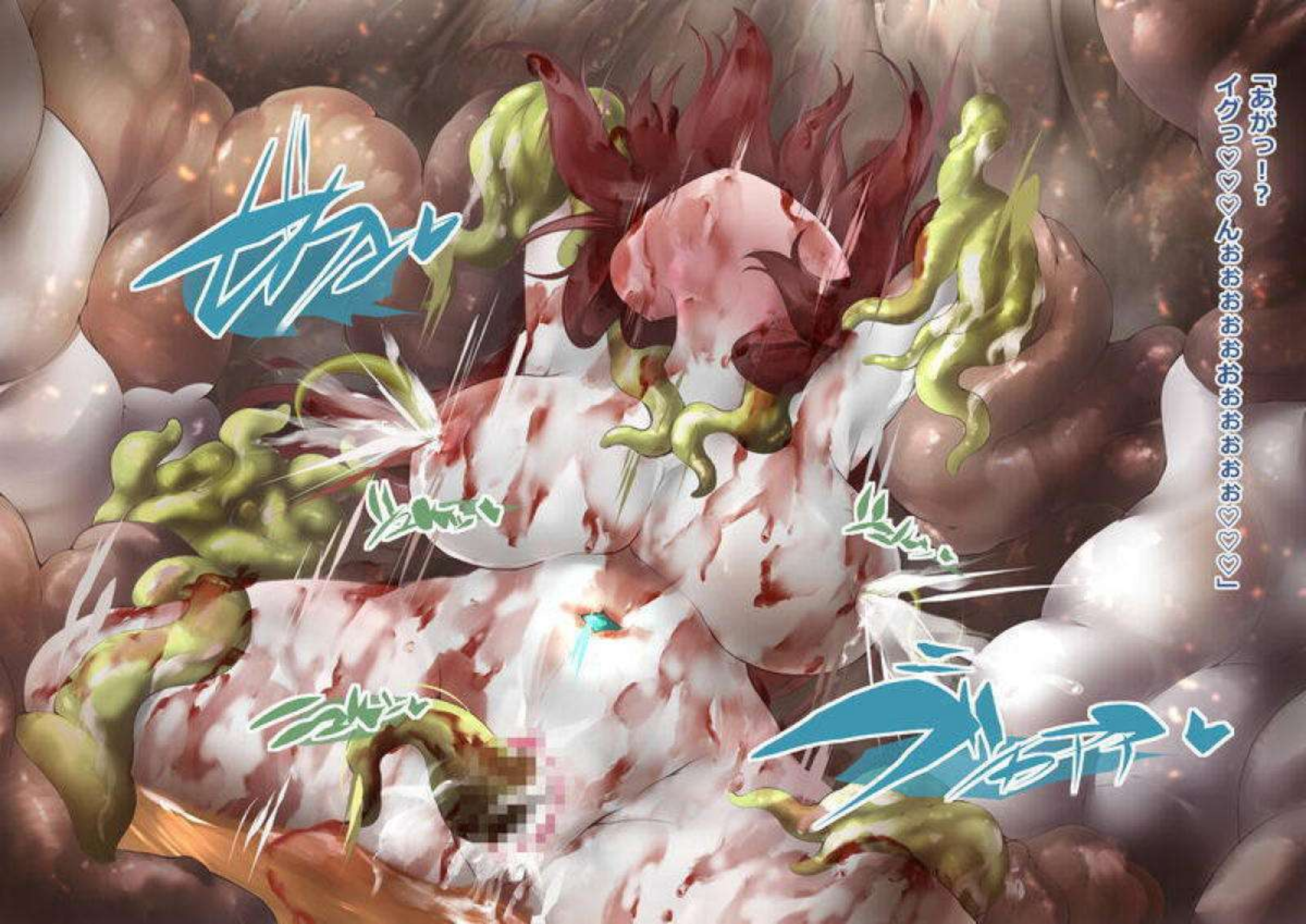
「へ…？植物のスーツが…変身が解けっ…」



おお

「あがつー？」

イクっ♡♡♡んおおおおおおおお♡♡♡」



「フ…ッライ…トッ♡フェッ…ザアア♡
エクспанションっ！」

は——っ♡は——っ♡」

（とっさに変身の言葉が浮かんで…っ。）

よかった…変身してれば大丈夫みたい…。

植物を植え付けられた私の身体…こんな状態になってるの？

怪物の植物から生まれた醜いスーツ…。

こんなもので私…自我を繋ぎ止められてるなんて…っ…。）

「流石エクスティアだな。」

あの状態から自力でよく変身できたではないか。

実感しただろうどうだ？生で今の身体を体験した感想は？

自覚ないままに快楽に溺れ切ったその身体…素晴らしいだろう？

とはいえそれでお前を壊す気はない。

ただの苗床ならその辺の女にお前の臍の種を植え付ければ仕上がるからな。」



「壊す気はない…苗床にもしない…？
これを植え付けられ、もう私は貴方の支配下なんでしょ…。
こんな状態にして何を企んでるの…？」

「お前を同胞にする…目的はただそれだけだ。
お前の肉体が仕上がれば解放してやろう。
したいように…本能のまま自由に生きるという。」



「したいように……
そんなの……まずはこの身体を元に戻さ……んぶっ……」
（口に直接……苦い……でもやっぱりチヨコレートの味……
……嘘でしょ……まてがなっけいも……）

「完全な状態となるまではまだ時間がある。
その間ゆっくり考えるがいい。
まずは仕上げた……たっぷり味わえ……」



「おほっ！～んん～っ！……
んくっ…んくっ…」
（臭い…苦い…っ…怪物の体液…汁飲まされてる。
吐きそう…っ…）
これ…おっぱいや子宮と同じ…
今までこんな注がれて…」



「栄養分で胃は満たされた。
さて……では仕上げの種だ。」

「ぶふっ……ひゃ……めえっ……
おまっおおっ♡んっ♡んっ……」



「うえっ…ぶはっ…ゲホゲホッ…う…ええ…」
（飲み込んだじゃった…）
早く吐き出さないと…駄目っ…出てこない…
私の胃の中で成長しちゃう…っ！



「うえっ！っおぶっ！……んうううっ！？」
（これ…おっぱいと同じ…）

PPを吸って胃の中で成長してるっ！……！？
嘘…登ってきてる…回から出る気なの？
駄目っ！お願い！出て来ちゃ…駄目ええ！！）



「おげえええ！？ふふっ
おごっ♡んおおおお♡」
「出てきてるっ…口から植物っ…
喉埋め尽くされて…っ…！
苦しいっ…息できな…っ…」

おめえ

おめえ



「がぼっ……んおっおお……むんっ♡」
（触手で元回復されて……）
（どんどん生きてくるっ……もう許してえ……）



「んじゅっ♡フシゅーッ♡フシゅーッ♡」
（苦しくなくなった…植物で塞がれたままなのに何で…？
これ…あの体液の味が口の中に…それにミルク？
そうか…これ私の…っ…
スーッと繋がっておっぱいから供給されてるんだ…
怪物の体液と私の母乳…こんなの駄目なのに…
……凄く……美味しいっ♡…）

「種は全て植え終えた。
時間は少しかかるがやがて完全に身体に馴染むだろう。
それまではここで過ごすといい。」



「おっっ…んっうっ!？」

（はっ…!!—受け入れちゃ駄目っ…!!

あうっっ♡駄目っ…怪物の植物に染められてっ…!!）



「ああ……このまま私……怪物に……
助け……て……創……ちゃん……」



3月13日ホワイトデー前日

植え付けられた種にもはや身体を支配され、手足の感覚が無い。もう抵抗も許されない状態だった。

反発し変身を解かれてしまえば正気すらも保てない。

私を壊さないという怪物の思惑を断とうと、自殺願望のように変身解除を試みた。しかし一度味わった快楽……それへの恐怖感がそれを許さない。

私は同胞化が済めば解放されるという怪物の言葉を信じる事しか出来なかった。

胃に種を植え付けられ口元を覆われて以降、私は怪物に手を出さなかった。

私は自らの母乳と植物のエキスを生かされ、私から生えた植物は私の体液で生きる。

私の身体は着実に植物に侵食されていく……もう抗う手段はない。

伝わる肉体的変化に心が何度も折れそうになる……

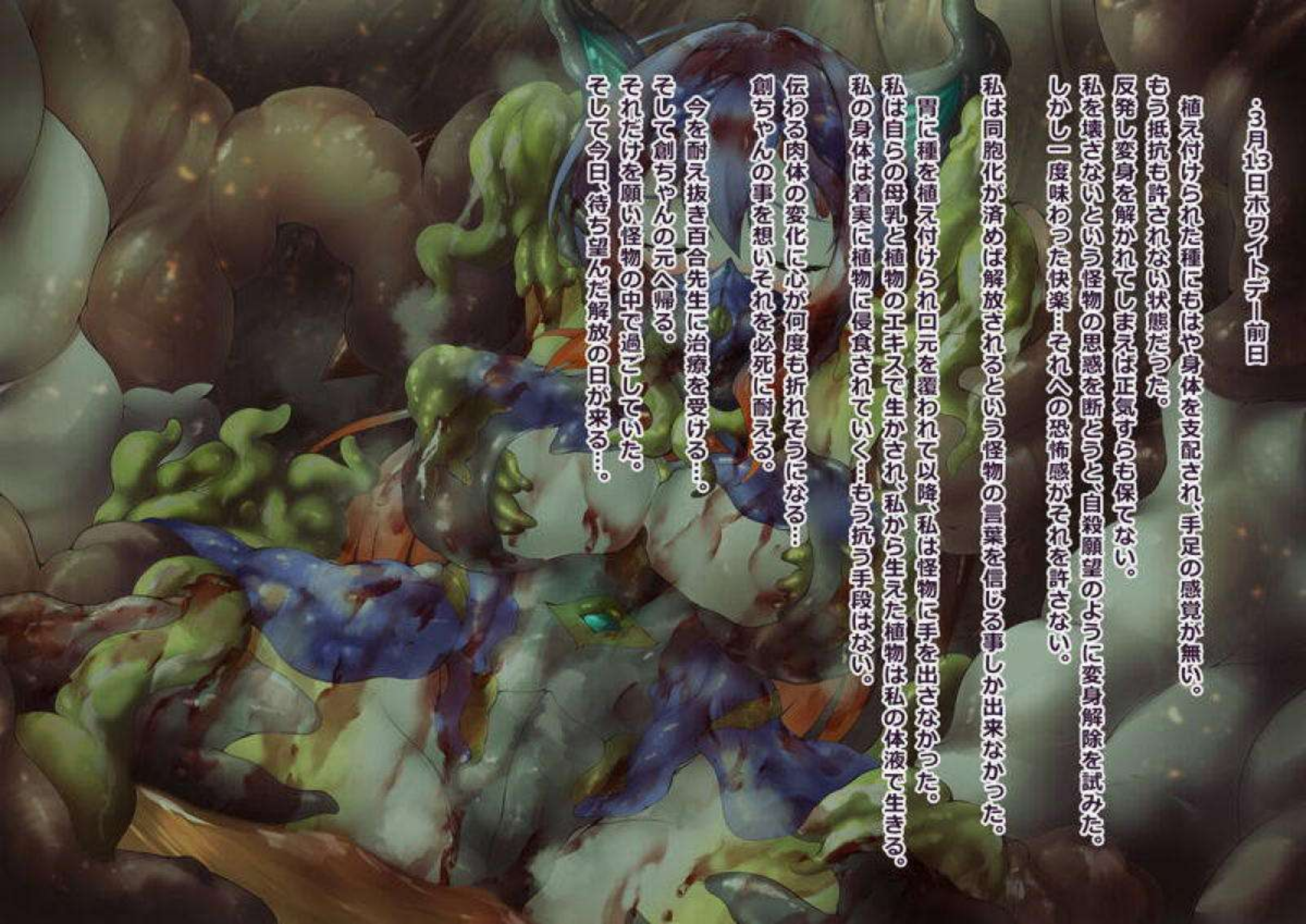
創ちゃんの事を思いそれを必死に耐える。

今を耐え抜き百合先生に治療を受ける……

そして創ちゃんの元へ帰る。

それだけを願う怪物の中で過ごしていた。

そして今日、待ち望んだ解放の日が来る……



「フシッ♡フシッ♡フシッ♡」

「うう…もうどれくらい経ったの…？」

最初とは全然違う…お臍もおんこも…おっぱいも胃の中も何ともない。
植物も私の一部になって…身体が…全身が心地いい…
元に戻りたいのに…怪物になったこの身体を受け入れちゃってる…。
このままでいいって…思っちゃってる…。」



「完全に馴染んだな。
人間の形はしているがお前はもう怪物……我らの同胞だ。
そこにエクスティアの力が溶け合い、更なる進化を遂げている。
生まれ変わった気分はどうだエクスティア？」

「フシエーッ……気分ですって……
フシエーッ……最低よ……っ。」



「…そうか。しばらくすれば意見も変わるだろう。
ではお前を吐き出し我は去ろう。
くく…お前と過ごすのも中々楽しかったぞ。
ではさっさと…」

「フシューッ…何を考えてるかわからないけど…、
フシューッ…貴方の思い通りにはならない。
いずれ身体を元に戻してっ…フシューッ…必ずあなたを倒します…っ！」

（既にお前は人ではない…欲望も思想も我らと同じだ。
お前の意志が固ければ、時をかければいずれ人になれるだろう。
だが…そうでない時は…。
次地球に来るのが楽しみだ。）

「ツシュツ〜」

「創ちゃん…私だよ！」

「操られたりはしてない…大丈夫だから…！
ごめんね…驚かせて…」

「あsbd!?!cじdskhjkんk!?!」

「…?」

「(…へ？創ちゃん…何て言ってるの？」

「まさか…言葉が理解できなくなって…!?!?」

「怪物にされた影響…?」

「そういうのはあの怪物とも最初は意思疎通が出来なかった…
でも…このままじゃ何も伝えられない…何もわからないわ。
どうしたら…?」

（そういうえば…あの怪物の音が聴こえ始めたのも私の身体が変化し始めてから…）

私にもあの怪物と同じ力が宿っている…。
創ちゃんにも種を植え付けられはきつと…。
へへ…。

（って駄目よそんなの…！何を考えてるの！？）

「jddhskii!nskjskii!」

（でも…うう…やっぱり警戒されてる…）

当たり前だよな…こんな姿で突然押し倒して…。

これじゃ騒ぎになる…討伐されかねない。

創ちゃんと百合先生だけにでも事情を伝えないと…。

創ちゃん…創ちゃんならきつと…

そう…浅く植え付けるの…後は私が制御すれば…。）

「ふしゅーっ…」

「ごめんね創ちゃん…ちよつとだけ我慢してね…！
服を破いて…ああ♡創ちゃんの…うぐっ…今は抑えてっ…。
やり方はわかる…。種を生成して…っ…。
私の時みたいに深く植えちゃ駄目…お臍に浅く埋め込むの。
一時的に種を植える…少しだけでも意志が伝われば…。
危なそうならすぐ引き抜こう…！」

「xhskh…!？」

オッ

ドゥン

「じゅー…。」

「根付いた…これで大丈夫…制御も出来てる。
しばらくすれば創ちゃんとも意思疎通が出来るはず…。
種を植え付けられた場所や身体の症状…それと…
ああ♡…創ちゃん…ううっ！
私の中で欲望が湧き上がってくる…
これ…怪物になった本能みたいなもののなの…？
一旦創ちゃんから離れた方がいいかもしれないわ…っ…。」

ふん

ふん

「つぶつぶ!!」

むぐっ!??

ミルクツ…駄目っ…今は…っ！

あううう…頭の中がまたふわふわしてっ…

駄目…意識を集中させ…あ…アア…♡

「いぬな……しっぴきだして……」



「私は…ああワタシ
ふしゅーっ♡フエビ♡♡
創チャンニ…チヨコ…チヨコオ♡」

おっ

「…うぐううううっ…はあ…はあ…
言葉がわかる…？この種は俺に意志を伝える為に…。
成功したんだな…でもこれは？
さっきまで眼が違う…どうしたんだ！？
チヨコって…そうかバレンタインの…！？」

「がぶっ！おほほっ！」

「アお創ちゃん…私の触手…啜えて♡バレンタイン♡
私のミルクチョコ♡飲んでくれてるっ♡
暴れナイで♡気持ちいいよ創ちゃんのお口…♡
ソッナニ嬉しいんだね…いくらでもアゲルヨ♡」

グッ

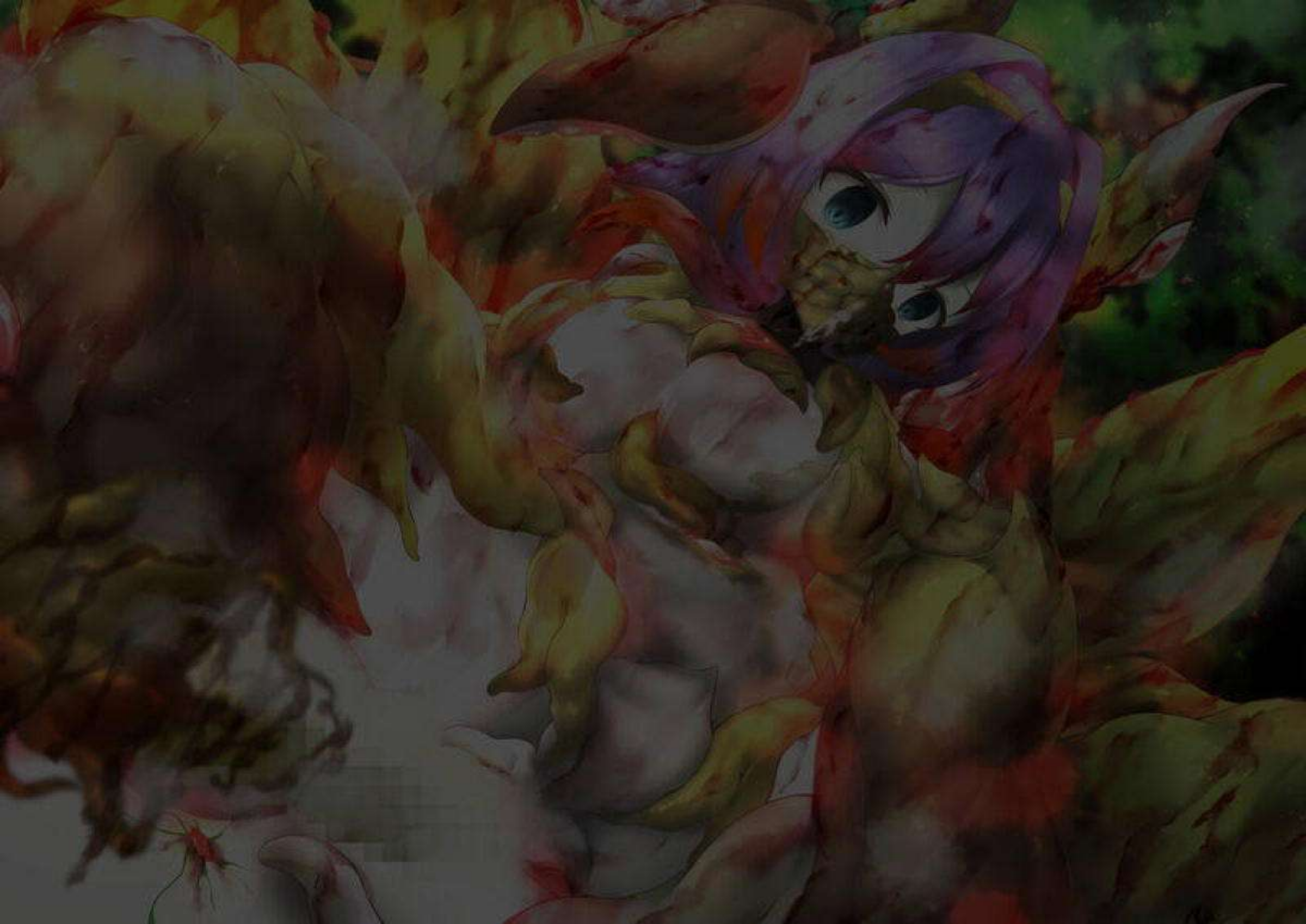
グッ

グッ

「いたたキマス♡」

From...





「うっ……あれ……私……？
え？……何が凄く身体が軽い……。
……そうだわ！……創ちゃんは！？」





「創ちゃん…ん…枯れて…？そうだ…私…私がやった…んだ…。
私のミルクチョコで狂わせて…
エクステリアになつてゐる私とは違う…普通の人間なのに…。
創ちゃんのミルク美味しくて…。
満たされたくて…気の済むまで養分絞り尽くして…っ…。
創ちゃん…創チャ…アアアアア！」

ドゥン

「アァ…♡ンウダ…。
創チヤンノ代ワリ…ミツケレバインダ…
モット…モット…頑丈ナノヲ…
♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

